

しもきた学講座

斗南藩基礎講座

第2回 斗南藩の誕生と藩士の移住

日 時 令和4年12月15日（木） 18:30～19:30

場 所 下北文化会館大集会室

講 師 斗南會津会会員 三浦 順一郎



斗南藩士上陸之碑

主 催 むつ下北未来創造協議会事務局

斗南藩基礎講座

第2回 斗南藩の誕生と藩士の移住

斗南會津会会員 三浦 順一郎

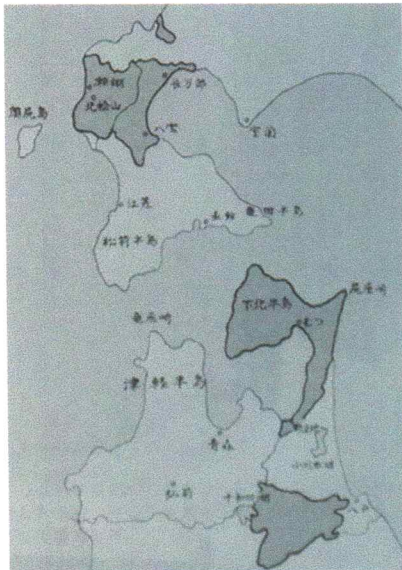
1. 斗南藩はいつできたのか

(1)斗南藩誕生 明治2年(1869)11月3日

陸奥国 ⇒ 北郡・三戸郡（青森県）、二戸郡（岩手県）を賜う
蝦夷地⇒瀨棚・太櫓・歌棄(後志国)・山越郡(胆振国)（北海道）の支配

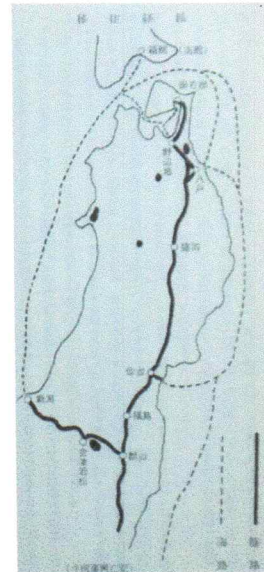
松平慶三郎容大に斗南藩3万石(実質7千石)

斗南藩領地



『北辺に生きる会津藩』

藩士の移住経路



『斗南藩史』

(2)斗南藩立藩 明治3年(1870)4月18日に斗南に移住した

五戸代官所跡に斗南藩庁を置く。後に田名部(円通寺)に藩庁を移転

(3)藩士の移住法

- ①海路 3日 A 東京→八戸→田名部→野辺地 B 新潟→野辺地→大平
- ②陸路 24, 5日 A 東京→八戸→五戸→野辺地→田名部
B 新潟→会津→仙台→野辺地→田名部

2. 斗南藩の由来は何から

(1)吉田東伍の『大日本地名辞書』 明治39年6月8日初版

[斗南とは「北斗以南皆帝州」の義にて、北遷の新藩に命名す]とある。出典は明記していない。

(2)『會津松平家譜』 昭和13年3月28日発行

會津松平家の通史である。そのなかに「藩名を斗南と稱(称)す」とあるのみである。

(3)葛西富夫氏の著作から

- ①[笹沢善八氏も下北半島史増補三版(60頁)に「北斗以南皆帝州」から出たものであると主張しておられる] (『斗南藩興亡記』 昭和41年)
- ②[笹沢魯羊は、その著書『下北半島史 増補三版』に「北斗以南皆帝州」(中国の詩文より)から出たものであると述べている。] (『斗南藩史』 昭和46年)
- ③『下北半島史』増補三版(笹沢魯羊著)には[中国の詩文のなかにある「北斗以南皆帝州」から出たものであると書かれている。] (『続会津の歴史』 昭和48年)
- ④[故笹沢善八氏(筆名は魯羊)は中国の詩文の「北斗以南皆帝州」から採ったものであると主張し、] (『むつ市史』 昭和61年)
- ⑤[笹沢善八氏(筆名は魯羊)は、長い間、中国の詩文「北斗以南皆帝州」から採ったものであると主張し、] (『会津・斗南藩史』 平成4年)
- ⑥[現在、最も有力なものは、下北地方の地方史研究家笹沢善八翁(筆名は魯羊)が発表した中国の詩文の中にあるという「北斗以南皆帝州」説である] (『会津藩落城・流転』 平成31年)

以上をうけて、多くの書物やパンフレット ⇒「中国の詩文《北斗以南皆帝州》からとったとされています」を孫引きしている。

(4)笹沢氏の著書に「中国の詩文」の文言があるか

- ①笹沢善八『下北郡地方誌 訂正再版』(大正15年10月31日)
斗南藩の項がない
- ②笹沢善八『下北郡地方誌 増補三版』(昭和5年11月11日)
斗南藩の項がない
- ③笹沢魯羊『田名部町誌 初版』(昭和10年10月27日)
「松平慶三郎公は新封を拝領して斗南藩と稱した。斗南とは「北斗以南皆帝州」の意に由るものにして、北遷の新藩に命名する處と云ふ」 P50
***「中国の詩文」と明記していない。**
- ④笹沢善八『川内町誌 初版』(昭和11年11月17日)
「松平慶三郎公は新封三萬石を拝領して斗南藩と稱した。斗南とは「北斗以南皆帝州」の意に由るものにして、北遷の新藩に命名する處と云ふ」 P48
***「中国の詩文」と明記していない。**
- ⑤笹沢善八『佐井村誌 初版』(昭和12年9月7日)
「松平慶三郎公は、新封三萬石を拝領して斗南藩と稱した。斗南とは「北斗以南皆帝州」の意に由るものにして、北遷の新藩に冠する處と云ふ」 P86
***「中国の詩文」と明記していない。**
- ⑥笹沢善八『風間浦村誌 初版』(昭和13年7月31日)
「松平慶三郎公は、新封三萬石を拝領して斗南藩と稱した。斗南とは「北斗以南皆帝州」の意に由るものにして、北遷の新藩に冠すと云ふ」 P127

***「中国の詩文」と明記していない。**

⑦笹沢魯羊『下北半嶋史 初版』（昭和27年9月20日）

「而して北には遷るが「北斗以南皆帝州」の意を以て、斗南藩と稱するに至った。 P41

***「中国の詩文」と明記していない。**

⑧笹沢魯羊『宇曾利百話 増補三版』（昭和36年11月15日）

[斗南藩の名は「北斗以南皆帝州」の意に出づる。北遷されても依然天子の領域たるに感泣しての名称である] P106

***「中国の詩文」と明記していない。**

⑨笹沢魯羊『下北半嶋史 増補三版』（昭和37年10月20日）

「北に遷ると雖も「北斗以南皆帝州」の意から斗南藩と号した。 P60

***「中国の詩文」と明記していない。**

⑩笹沢魯羊『東通村誌 改訂再版』（昭和39年9月20日）

斗南藩の項がない

⑪笹沢魯羊『下北半嶋史 改訂四版』（昭和41年6月30日）

「北に遷ると雖も「北斗以南皆帝州」の意から斗南藩と号した。 P59

***「中国の詩文」と明記していない。**

(5)中国の文献に見える「北斗以南」

○北斗以南一人而已(『唐書 狄仁傑傳』) 諸橋轍次『大漢和辞典』

(6)日本の漢詩にある 類似した文言

○令により蝦夷の斜里に移さる。病中得る所 秋月悌次郎(胤永)

京洛斯時合献謀 京洛斯の時に合い、謀ごとを献ず

謫居臥病北蝦州 謫居病に臥す、北蝦州

死埋枯骨還非悪 死して枯骨を埋むるも、還悪くからざらん

唐太以南皆帝州 唐太以南、皆帝州

(京都にいる時は容保公のおそばにいて、いろいろ政策を献言したが、いまは北の蝦夷地に謫居しており、しかも病に臥す身である。この地に骨を埋めるのも悪くはない。そんな心境になっている。なぜなら唐太から南は皆、天子さまの領土、日本であるからだ)

星 亮一『幕末の会津藩』

(7)その他の説

①新政府に怨念の炎を燃やし、斗南を南斗六星に結びつけた (葛西富夫)

②外南部の名称から出た

「南部三万石の地を唱へて斗南と云、斗南とは外南部の謂なり」(北下日記)

③竹浪和夫「斗南藩命名の謎——「北斗以南皆帝州」の出典を探る

(「下北文化」44号平成22年11月1日)

インターネットで検索したところ、中国の史書には「北斗以南皆帝州」の文言は見当たらない

(8) 結論

◎笹沢魯羊は中国の詩文からとったとは書いていない。

◎「北斗以南皆帝州」の出典はわからない(中国の詩文に実在しない、日本の漢詩にもない)

◎斗南の由来は、結局わからない。

3. 『萬日記』に見る三戸への移住

①明治三庚午年(1870) 正月廿六日 晴天

王政と計り申す触側々の讒言にて様々同盟の諸侯へ迷惑相懸け候と見得候、如何様の儀出来申すべくも計り難く候、会津杯も二十三万石御取り上げ、**日本一の粗地吟味の上、昨年未曾有の凶作の場合下され候と見得候**

(王政と称す触を側々の讒言で、同盟に加盟した諸大名に迷惑をかけたと思われる。どのような儀が発生するのか推測できない。会津藩の場合は二十三万石を取り上げ、**日本一の貧弱な地を調査し、その上、南部藩は昨年(明治2年)は未曾有の凶作であった。その土地を下したと思われる**)

*この年(明治2年)の旧盛岡藩領は大凶作で、特に田名部通では行き倒れや捨子が多かった。12月25日に、政府は田名部の窮民40戸に4斗入りの稗25俵を支給した。

②十一月 八日 冷雨

会津藩先月廿五六日頃より日々二百五拾人宛陸地下向、**八千人**、陸路五千人程引き越しの由にて、日々通行在々へ下宿割に相成り、老若男女何れも歩行にて、日数十八九日の積にて罷り下り候由、衣服は薄く、荷物は五貫目に限り候由、扱々痛み入り候事に候、其の上、年内中扶持下され候様之れ無き由、日一人玄米三合積に下され候由、大いに困り申すべく候

(会津藩士は先月(十月)二十五、六日頃から、毎日二百五十人ずつ陸地を下ってきた。**八千人**である。陸路は五千人程引き越して来た。毎日村々へ宿泊場所を割りあてなければならぬ。老若男女はどれも歩きで、日数は十八九日のつもりで下ってきたとのこと。衣服は薄着で、荷物は18.75kgと限られている。なんとまあ不愆なことよ。其の上、年内中に扶持をもらえそうにない、一日に一人に玄米三合ほど下さるとのこと。大変困ったことになった。

4. 『村上権兵衛日記』に見る田名部への移住

(1)会津様一行大平浦着(明治3年、1870年))

一 午六月十日夜中 会津様御人数千八百人蒸気ニて大平浦へ御着船相成候旨
十一日暁 検断所へ訴出ル

(午年の六月十日の夜中に、会津様御人数1800人が蒸気船で、大平浦に御着船になら

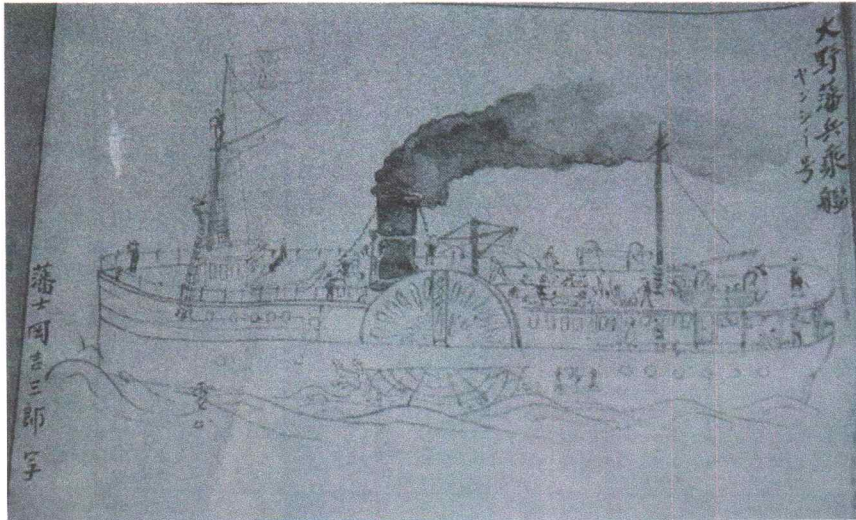
れた旨、十一日の暁に検断所へ届出る)

*蒸気船(外輪蒸気船ヤンシー号)

(2)御人数八百人程田名部へ着

一 六月十一日より御人数上陸の上 八百人程 田名部へ着 三ヶ寺へ五百五六十人
善宗寺へ五十人 市中分散宿 大混雑

(六月十一日から人数が上陸し、八百人程は田名部に着き、三ヶ寺(円通寺・徳玄寺・常
念寺)へ五百五六十人、善宗寺へ五十人と市中に分散して宿とした。大混雑であった)



外輪蒸気船ヤンシー号の模写
鳴海健太郎氏発見

5. 荒川勝茂の『明治日誌』に見る移住先

この日誌に心温まる部分がある。荒川勝茂は田屋村(現東通村田屋)に割り付けられた。妙見平から^{あべらがわ}青平川を渡るとすぐの村が田屋村である。その先端が青平村である。

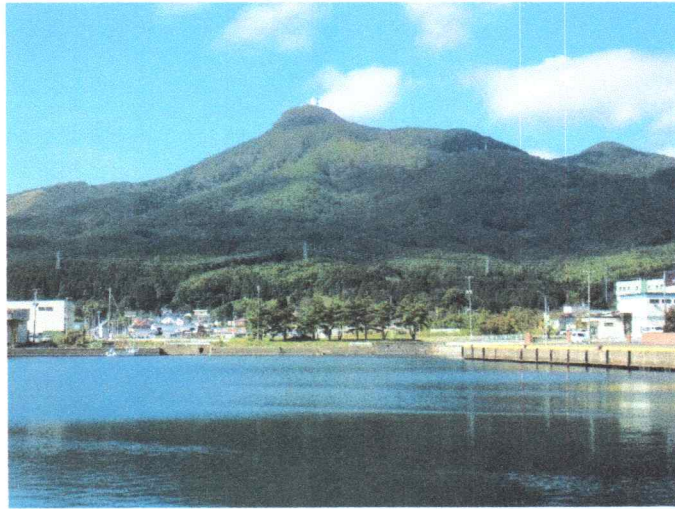
明治3年7月10日の日記に、勝茂は書いた。

一 今日九ツ時頃、割付田屋村 右端村青平村ト申、平七宅へ着ス、右家主平七村ノ先迄迎ニ出ツ

(今日の12時ころ、割付けられた田屋村(右端の村が青平村である)の平七宅へ到着した。
家主の平七は村の先まで出迎えに来た)

簡単な記載であるが、応対に感謝しているのがわかる。

田屋村には次の7人も割付けられた。成瀬鉄之助 山本道珍 笠尾八重八 風間久蔵 外島藤五 牧野安之丞 禰津秀松



釜臥山